

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20390556

研究課題名（和文） 糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討

研究課題名（英文） A trial to make a practical embodiment care for diabetic patients

研究代表者

野並 葉子（NONAMI YOKO）

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：20254469

研究成果の概要（和文）：糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討を行い、3つの成果が得られた。(1)糖尿病エンボディメントケアである4つのケアのうち残りの3つのケアである「身体を理解を深めるケア」「身体の信頼感を取り戻すケア」「新しい対処法を身につけるケア」のプロトコルを具体化し精練した。(2)Community of Practiceの手法を用いた看護者からなる実践共同体の育成を行い、実践コミュニティを発展させた。(3)糖尿病患者からなる実践共同体において「糖尿病エンボディメントケア」を用いた学習支援プログラムの有用性を検討し、実践共同体の成長のプロセスを明らかにした。

研究成果の概要（英文）:By investigating practices of embodiment care for diabetic patients, following three results of nursing care were obtained. (1) We prepared and brushed up concrete protocol for three types of care amongst four types. The three were, the first, to make good understanding to their own body, the second, to recover their credible self-confidence to their own body, and the third, to think out novel prescriptions to new situation. (2) We created and developed practical nursing-community using the method of *Community of Practice*. (3) We examined availability of the study-supporting system by the use of diabetes-embodiment care in real community of diabetes patients, and revealed developmental processes in the practical community.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	11,600,000	3,480,000	15,080,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：糖尿病患者、ケアリング、エンボディメントケア、病気、生活

1. 研究開始当初の背景

生活習慣病の中でも糖尿病は、とりわけ生活と密着しており、療養のための患者教育が必要と考えられ、昭和30年代から「糖尿病

教室」「教育入院」が取り入れられ、知識教育という点において成果を得てきた。また新たな試みとして、行動科学の考えを基にした自己効力及び目標／意図の概念を取り入れ

たモデルや患者の心理状態を踏まえた糖尿病患者の指導・教育として変化ステージモデルを用いた心理学的アプローチが導入されている。しかし、全国調査からも分かるように、糖尿病患者及びそれによる合併症を持った患者は年々増加の一途をたどっているのも事実である（糖尿病実態調査,2002）。

生活習慣に起因する疾患としての糖尿病は遺伝、発症年齢、発症過程、発症後の代謝異常の程度、治療に対する反応性と経過、合併症の発症と進展、予後など極めて複雑多彩な疾患である（小坂,2005）。一方、能力の喪失や機能不全をめぐる人間独自の体験である病気（illness）（Benner . P,1999）としての糖尿病は、さらに複雑である。なぜならば、その発症過程においても、療養過程においても、糖尿病患者は自己理解、つまり自分自身が日常生活にどのように対処しているのか、どのように対処してきたのか、生きていることの根幹を生活の中に問われることを求められる。研究者らは先行研究において、以下の4点を明らかにした。

(1)「糖尿病患者へのエンボディメントケア」モデルの開発（第10回日本糖尿病教育・看護学会発表、2005）

知と行為の働きにとっての基盤としての身体を軸にし、糖尿病患者の身体に根ざした知を引き出す看護ケアを、エンボディメント（embodiment）ケアとして構造化した。

(2)コアとなる高度看護実践者の教育

研究協力者（大学院看護学研究科修士課程で慢性疾患看護専門看護師を養成する教育課程を修了し、臨床で活動している高度看護実践者）への教育・トレーニングを行った。ワークショップⅠ・Ⅱを開催し、糖尿病患者へのエンボディメントケアのプロトコル内容の説明と技術の確認を行った。

(3)「あいまいな体験に輪郭を与えるケア」の介入プロトコルの作成（Prevention and Management of Chronic Conditions; International Perspectives in Bangkok, 2006）

このケアの具体的な介入プロトコルは、①身体の感覚に働きかける、②見ていなかった足を見る、③全身をくまなく見る、④生活の体験を聴くという4つのサブケアで構成されている。プロトコルの構造は、ケアの態度とケアする人の体の距離や高さなどの物理的環境を含んだ姿勢と、説明をすることや動作と行為を含んだ手の動きや問いかけること、反応を捉える視点を含んだ働きかけで構成されており、基礎知識、必要物品、記録用紙を含めて開発した。

(4)「あいまいな体験に輪郭を与えるケア」の有用性の検討（日本慢性看護学会、2011）

ウィリアム・ホルツマーらによって開発された、ヘルスケアリサーチのためのアウトカ

ムモデルを用いた評価研究を実施している。共同研究者が所属する施設で、研究への参加に同意が得られた糖尿病患者に対して、作成した介入プロトコルに沿って、データ分析を行っている。

2. 研究の目的

本研究においては、研究前半の2年間で、残っている3つのケア(1)「身体を理解を深めるケア」「身体の信頼感を取り戻すケア」「新しい対処法を身につけるケア」のプロトコルの作成及び有用性の検討を行う。3年次より、本モデルの洗練のため国内外へ公表するとともに、(2)Community of Practice法を用いて、リーダー及びコアメンバーからなる実践共同体の育成を行い、(3)糖尿病患者からなる実践共同体において「糖尿病患者へのエンボディメントケア」を用いた学習支援プログラムの有用性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)「身体を理解を深めるケア」「身体の信頼感を取り戻すケア」「新しい対処法（生活習慣）を身につけるケア」の介入プロトコル作成及び有用性の検討

研究デザインは、ウィリアム・ホルツマーらによって開発されたヘルスケアリサーチのためのアウトカムモデルを用いた評価研究とした。研究協力者は、研究への参加に同意が得られた糖尿病患者とし、糖尿病患者へのエンボディメントケアのプロトコルに沿って、実践を行った。研究データの偏りを排除するため、設置主体や地域の特性が異なる施設で行い、研究結果の信頼性が得られように、研究対象者については約10名とした。平成20年～22年にかけて、1年に1つのプロトコルを実施し、慢性疾患看護専門看護師、ワークショップに参加した糖尿病看護認定看護師を本研究の協力者としてデータ収集を行った。倫理的配慮としては、実施にあたっては兵庫県立大学看護学部研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て行った。

(2) Community of Practiceの手法を用いた看護者からなる実践共同体の育成

Community of Practiceの手法を用いて看護者のリーダー及びコアメンバーからなる実践共同体の育成を行い、その有用性を検討する。理論的前提としては、Community of Practiceの考えは、ある分野における知識の習得や研鑽あるいは、知識を生み出すといった活動のために持続的な相互交流を行っている人々の集団のことで、1991年にエティエンヌ・ウエンガーらによって作りだされた参加の枠組みである。参加者は、正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation）を通して学習プロセスが促進され、思考・行

為・知識を共同して創出していく(図1)

研究の手段(tool & technology)とし

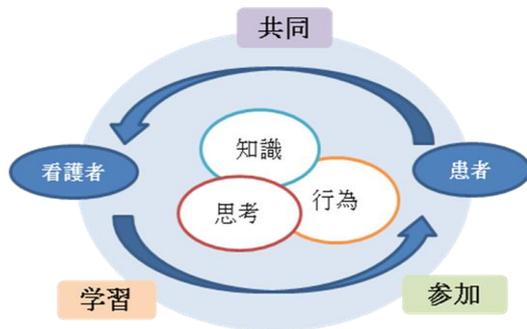


図1. 実践共同体の枠組み

て、研究協力者である慢性疾患看護専門看護師を中核とした実践共同体(コアメンバーおよびメンバー)と研究者間での研究を円滑に進めるウェブサイトを開設し、情報の共有が図れるようにした(図2)。実践共同体のコアメンバーの活動はface to face meetingおよびメーリングリストやウェブサイトを用いた。研究協力者(慢性疾患看護専門看護師)と研究者でのミーティングを年間3~4回開催し、研究が円滑に進行するようにした。

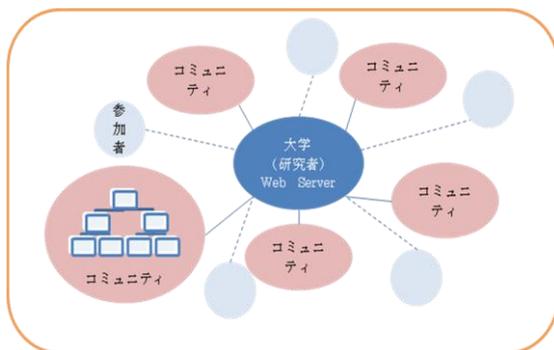


図2. 大学と実践コミュニティの関係

(3)糖尿病患者からなる実践共同体において「糖尿病患者へのエンボディメントケア」を用いた学習支援プログラムの有用性を検討

臨床における実践共同体の枠組み(図3)として、臨床における実践共同体とは、まずは看護者の実践共同体に参加した看護者がリーダーとなりリーダーシップが発揮される。患者及び看護者はコミュニケーションやメンバーシップを通して参加していく。メンバーである患者及び看護者は、初心者か

ら熟練者と様々なメンバーから構成される。そして、参加者は正統的周辺参加

(Legitimate Peripheral Participation)により、学習者となる。学習によって獲得される技能は相互作用的生産的な役割を担う。それらの参加、学習によって共同体として知識・思考・行為を創出する。

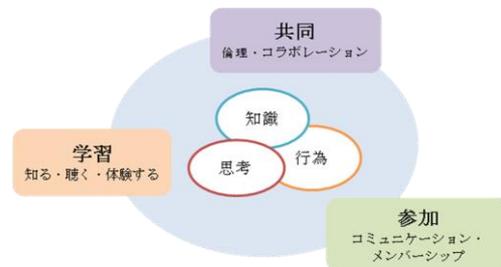


図3. 臨床における実践共同体の枠組み

研究デザインは評価研究とし、研究対象者は研究への参加に同意が得られた看護者と患者とした。全国5か所の看護者の実践共同体を中核として、糖尿病患者を募り糖尿病患者へのエンボディメントケアの学習を促進していく共同体をつくり、共同体の中でお互いが学習者であるというパラダイムが創出される中で、看護者、患者がどのようなことを学習し、どのような社会組織へと成長していくかを明らかにする。実践共同体の中でどのような変化が現れたか評価するための指標として、患者の健康状態、看護者・患者それぞれの学習者としての知識を明らかにする。また、患者側・医療機関側の医療費の変化をみていく。これらの指標を実施前、中間(半年)、実施後の3時点で評価することを設定した。

4. 研究成果

(1)「身体を理解を深めるケア」「身体の信頼感を取り戻すケア」「新しい対処法(生活習慣)を身につけるケア」の介入プロトコル作成及び有用性の検討

まずは3つのプロトコルの内容の検討を行った。「身体を理解を深める」ケアのプロトコルは、①「身体を労わって食べる」という理解を促す、②「心身ともにウェルネスな状態を維持する」という理解を促す、③身体の回復の可能性について理解を促すこととなった。これは、自分の身体を意識することができるように働きかけていくケアである。

「身体への信頼感を取り戻す」ケアのプロトコルは、足の手当てを通して①身体を体験してもらう、②身体を感覚することを促す、③新しい対処を取り入れてもらう、④よくな

っていく身体を実感することを促す（動機付け）こととなった。これは、身体感覚を取り戻していくことを支援していくケアである。「新しい対処法を身につける」ケアのプロトコルは、①対処法を提案する（相談機能）、②実践状況を確認する（相談機能）、③対処法の根拠を伝える（相談機能）、④対処法の調整を手助けする（調整機能）、⑤他の対処法や社会資源を提供する（調整機能）、⑥生活している個人を認める（調整機能）こととなった。これは、生活に組み込んでいくことを支援していくケアである。また実際に実践者である慢性疾患専門看護師が臨床で本プロトコルを使用し、介入プロトコルの検討では看護師の姿勢、問いかけ、手の動き、患者の反応を捉える視点からケアを構造化しそれぞれのプロトコルを具体化し、洗練させていった。また、ワークショップを開催しながら、糖尿病患者へのエンボディメントケアである「あいまいな体験に輪郭を与えるケア」「身体を理解を深めるケア」「身体への信頼感を取り戻すケア」「新しい対処法を身につけるケア」のプロトコルの精錬を行った。

(2) Community of Practice の手法を用いた看護師からなる実践共同体の育成

まずは実践共同体を作成していくため、Community of Practice の理論について研究メンバーで勉強会を開催するとともに、糖尿病患者への看護を実践している看護師を対象とした交流集会（日本糖尿病教育看護学会第 14 回学術集会）および「糖尿病患者へのエンボディメントケア」ワークショップをそれぞれ開催した。

実践家育成のためのワークショップを開催し、実践コミュニティに参加することでどのような学習の軌道があるのか、どのような知識が生まれるのか、どのようにコミュニティが発展していくのかについて検討していくことを目的とした。ワークショップは、エティエンヌ・ウエンガーらによる Community of Practice の考えを基に、実践コミュニティに参加することを通して学習者個人の能力が向上することと実践コミュニティの発展を目指した。プログラムは「知識の獲得」「観察と模倣」「共有」をもとに構造化し、①ケアの概要の説明、②デモンストレーションと演習、③グループディスカッションを組み合わせ、④インターネットコミュニティを開設することを通してメンバー同士のつながりをはかり、暗黙知と形式知の融合を促す「語り」によるコミュニティへの参加要素を組み込んだ。

実践共同体の育成に関しては、平成 23 年度までは兵庫県立大学を拠点に行っていたワークショップを、関東地域にも広げ、6 回

を 1 クールとしたワークショップをのべ 5 日間ずつ、関東・関西の地域でそれぞれ行った。

「糖尿病患者へのエンボディメントケア」モデルを開発した 15 名のコアメンバーを中心に 4 年間で計 5 クールのワークショップを開催し、「糖尿病患者へのエンボディメントケア」モデルの技術移転を行った。これにより、実践共同体は計 83 名のコミュニティへと発展した。参加者は、「知識の獲得」「観察と模倣」「共有」を通して、看護師としての態度『ケアする自分を意識する体験をすること』、『患者の元に居る居方』を捉えた。さらに、患者の身体と生活をつなぐケアの必要性や患者を気遣っていくということの意味を改めて感じたり、臨床現場で患者の反応が変わり、看護師としての自分に変化したことに気づく参加者もいた。

(3) 糖尿病患者からなる実践共同体において「糖尿病患者へのエンボディメントケア」を用いた学習支援プログラムの有用性を検討

学習支援プログラムの有用性の検討を行うために、ワークショップの開催時にフォーカスグループインタビューを計 12 回行い、データを収集した。平成 22 年度に実施したワークショップのデータ分析を進め、「学習の軌道」として参加者は実習、討議、臨床で自分の実践を振り返り、糖尿病患者への向き合い方を考えたり、自分のいるコミュニティにケアを広げることが検討したり、患者への関心や探求が生まれ、最初は馴染みのないエンボディメントケアに違和感をもっている様子があったが、徐々にケアプロトコルに対して批判、評価がなされ、プロトコルの修正につながる意見が出されるなど、コミュニティの中で「知識」が生まれていった。

データの分析に関しては、平成 23 年度に行ったワークショップ時のフォーカスグループインタビューの内容を中心に、どのように実践家が育成されたか、どのように共同体が成長していったか、質的データを分析し、知識の獲得、学習の軌道、コミュニティの発展の 3 つの視点から学習支援プログラムの有用性の検討を行った。ワークショップを重ねる毎に共同体の理解が進み、コミュニティへの参加の仕方に変化がみられ、洞察が生まれるなど「コミュニティが発展」していくプロセスが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 10 件）

①齋藤美子、魚里明子、片岡千明、馬場敦子、松井美貴、山根晴香、野並葉子、「糖尿病患者へのエンボディメントケア」プロトコルの実用化に向けて、日本糖尿病教育・看護学会、2012年9月29日、国立京都国際会館（京都府京都市）

②上野聡子、米田昭子、野並葉子、添田百合子、伊波早苗、馬場敦子、「糖尿病患者へのエンボディメントケア」実践事例の報告、日本慢性看護学会、2012年6月29日、アクトシティ浜松コンgresセンター（静岡県浜松市）

③河田照絵、伊波早苗、米田昭子、馬場敦子、添田百合子、上野聡子、佐佐木智絵、藤原由子、野並葉子、CoPの技法を用いた糖尿病患者へのエンボディメントケア実践家育成のための学習支援プログラムの効果、日本慢性看護学会学術集会、2012年6月30日、アクトシティ浜松コンgresセンター（静岡県浜松市）

④上野聡子、米田昭子、野並葉子、伊波早苗、添田百合子、馬場敦子、交流集会「糖尿病患者へのエンボディメントケア」実践事例の報告、第5回日本慢性看護学会学術集会、2011年6月26日、岐阜県立看護大学（岐阜県羽島市）

⑤野並葉子、糖尿病患者へのエンボディメントケアの有用性の検討—あいまいな体験に輪郭を与えるケアに焦点をあてて、第4回日本慢性看護学会学術集会、2010年6月27日、かでの2・7（北海道民活動センター）（北海道札幌市）

⑥野並葉子、米田昭子、伊波早苗、鈴木智津子、馬場敦子、交流集会「『糖尿病患者へのエンボディメントケア』モデルの中核的な技能」、第14回日本糖尿病教育・看護学会、2009年9月19日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

⑦馬場敦子、米田昭子、野並葉子、河田照絵、糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討—「新しい対処法（生活習慣）が身につくケア」のプロトコル作成—、第14回日本糖尿病教育・看護学会、2009年9月19日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

⑧伊波早苗、曾根晶子、魚里明子、近藤千明、野並葉子、河田照絵、糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討—「身体への信頼感を取り戻すケア」のプロトコル作成—、第14回日本糖尿病教育・看護学会、2009

年9月19日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

⑨鈴木智津子、添田百合子、上野聡子、齋藤美子、仲村直子、野並葉子、河田照絵、糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討—「身体を理解を深めるケア」のプロトコル作成—、第14回日本糖尿病教育・看護学会、2009年9月19日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

⑩米田明子、曾根晶子、添田百合子、馬場敦子、野並葉子、河田照絵、糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討—「あいまいな体験に輪郭を与えるケア」のプロトコル作成—、第14回日本糖尿病教育・看護学会、2009年9月19日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.seijin-hyogo.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野並 葉子 (NONAMI YOKO)
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号：20254469

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

米田昭子 (YONEDA AKIKO)
山梨県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：70709732
添田百合子 (SOEDA YURIKO)
創価大学・看護学部・准教授
研究者番号：50512034
魚里明子 (UOSATO AKIKO)
関西看護医療大学・看護学部・教授
研究者番号：90461160
河田照絵 (KAWADA TERUE)
東京医科大学・医学部・講師
研究者番号：40438263
佐佐木智恵 (SASAKI TOMOE)
近大姫路大学・看護学部・講師
研究者番号：20335904
片岡千明 (KATAOKA CHIAKI)
兵庫県立大学・看護学部・助教
研究者番号：40336839
藤原由子 (FUJIWARA YOSHIKO)
兵庫県立大学・看護学部・助教
研究者番号：70549138